「み～んなそろって学校へ行きたい！」を読んで

当ＨＰのメモ帳Ｐで紹介している書籍「み～んなそろって学校へ行きたい！－『医療的ケア』が必要な子どもたちの願い－」を早速購読した。

児童書だけに、事例、写真等を掲載して、医療的ケアを必要とする子どもの様子、家族の支えの様子、学校へ行きたい願い等が、読み易く、分かり易く書かれていた。

この本は、医療的ケア故に、そうした子どもの学校教育受け入れに戸惑い、不安を感じてる教師の方々に、まず読んでもらいたいというのが、最初の読後感。

医療的ケアの必要な子どもの教育については、しばしば当ＨＰで触れているので、あえてここでは記載しないが、この問題は、子どもや家族の問題でなく、要は、教育行政側の不理解の問題。それだけに、こうした書籍は、事例の実態を分かり易く書かれているだけに、啓蒙書としては、打って付けでないかと思う。

書籍からも感じられるが、医療的ケアを必要とするのは、その子どもの一側面に過ぎない。その子どもの責任でない一側面だけをクローズアップして、その子どもの全人的な存在、生活に係わる営みに関係することを制限する（ex. 教育環境を整えない）ことは、何としても避ける工夫をしなくてはならないと思う。それは、我々大人（社会）側の努力・工夫で改善可能なことなのだから…。書籍の事例から、そのことを再認させられた。

ＨＰバックナンバー福祉・教育・医療関係（Ｉ）Ｐ 2003. 3.17：「地域の小学校へ入学の報」に触れている親子に出会っているだけに、周りの工夫・努力次第で、地域の「学校へ行く」ことは、可能なのである。

この母親は、入学前に、養護学校か、地域の小学校かを迷っている時、「もし養護学校に行ったら、卒業後会いに来てくれる同級の友人はいないかもしれない。だから地域の同級の友人が会いに来てくれたり、町で会った時に、友人が声をかけてくれる地域の学校に入れたい」といった言葉が耳に残っている。正に、「地域で共に生きる」ということは、そういうことだと思う。

医療的ケアを必要とする子どもの教育は、単に教育権を保障すればいいという問題だけでなく、先々地域で生活するということまで考えて取り組んでもらいたいと強く願う。

（2005 年 1 月 29 日　記）